

ジャワ好日

佐藤和穂

秋田の平年は、葉桜という時期に、今年はまだ桜が満開、秋田気象台から、ここ十年間で二番目の寒い四月であったと発表されるなど、異常気象とも思われる今日。

雪の秋田から、太陽の国インドネシアに、JICA（国際協力事業団）の一員として過ごした「ジャワ好日」に思いをめぐらしペンをとって見た。

自分の任務は、地すべりの調査ボーリングオペレーションとして、建設省土木研究所地すべり研究室室長、吉松博士に同行し、実技指導と講義を、現地公共事業省の研修生に行なうことであったが、短期専門家ということで、現地での移動、報告書作成、関係機関への表敬など、10日間の強行スケジュールであった。

首都ジャカルタは、さすが大近代都市の構えであったが、メイン現場となったハウゼア地区は、首都より車で1日がかりの地方都市チレボンから、更にジープで2時間を要する山裾の集落であった。この地区は、電気はあるが、それを利用している家が少なく、利用している家でも電灯1個だけという状態であった。しかし、集落民は、明るく、皆人なつっこく、我々の訪問に、ど

こからともなく、大勢集まってきた。

この地区では、15年前に、地すべりのため民家が数軒、移転したという。当時は災害など異変が発生すれば、その場から逃れるより術がなかったようだが、近年は、国が災害対策を講ずるようになった。そのため、砂防、地すべり対策技術に本腰を入れ、JICAがプロジェクトチームを結成したものである。

地すべり地の地層は、第三期層であり、安山岩の転石混り崩積土、それ以深は、泥岩であり、日本の地すべり地の地質コアを見ているようであった。バンドンから来ているという、ボーリング業者が、事業省の委託で採取したコアの状態は、崩積土以外は、採取率良好であった。しかし、地下水の記録や、その他の掘進データが何もない為、次の日の講義でこれらの点を中心に指導した。

ここハウゼア現場は、耕地ではあるが、傾斜地形で、運搬路は、超不整地の状態、重い資機材の運搬は、全て人力で運んだと聞いて感服した。人材の豊富なこの国ならではの技と思われました。

現地の生活については、イスラム教国の

断食期間と重なり、太陽が昇っている日中は、食べ物を口にせず、水すらとらないらしい。滞在期間中、研修生達と夕食パーティをしたが、早目に集合時間を決めてしまい、夕暮れまで、目の前のごちそうやビールとにらめっこで、サイレンの合図を待つのだった。

日本語しか出来ない私の「カンパイ」でパーティは始まったが、生ぬるく、苦いビールはまさに「苦い経験」を味わった。

彼等には飲酒の習慣がなく、甘そうな、ココナッツジュースを飲んでいる。我々日本人だけが酔っていたようである。食べ物は、全般に辛い、私の口には合ったせい



ボルブドゥール寺院をバックに向かって右は吉松博士（建設省土木研究所地すべり研究室）

か、特に不満はなかった。

研修生達は、のんびり型の国民性というのか、あまり急がず、明日になれば、何とかなるというような雰囲気、多少不安が感じられたが、皆がまじめであり、砂防、地すべり対策の重要性を十分認識しており、今後の、技術の向上は、有望であると感じてきた。

かって、その豊かな資源を求めて、日本軍が、蹂躪したこの地の発展に、少しでも貢献できたのであればと、ボルブドゥールの壮麗な仏塔の情景と共に平和の日々を感謝の心で思いおこすこの頃であります。

（奥山ボーリング株式会社）



ハウゼア現場

調査ボーリング作業中。試錐機はアメリカ製油圧式。

中央は本人。向かって右はジョグジャカルタ駐在長期専門家大内氏。向かって左2人は研修生。